創ってみよう！鴻臚館の香り

田中 圭子 先生

香りの材料を たくさん用意してくださいました

明るく楽しく為になる！
笑顔満開の会場には なんとも雅な香りが漂い…。
さあ オリジナルの香りを創ろう！
と真剣に向き合うは「1 日調香師」の皆さん。わくわくドキドキの時間が始まりました！

ベースの香りを作ります。
乾いた材料に蜂蜜を入れて…よ～く混ぜて。
材料が重たくなったので 大人に交代。

鴻臚館の時代に使われていた材料を間近に感じて，香りのイメージは準備 OK！？
さあ本番！ 香りづくりに挑戦！
思いどおりの香りになりますように…。

←蜂蜜で練った材料は
カラに…大人気！

最後は人気投票！みんな どんな香りに仕上げたんだろう？

TOP 3 のみなさんです！おめでとうございます！！

田中先生，楽しいお話をありがとうございました！

令和元（２０１９）年１１月９日（土）１３：３０－１５：００

於・福岡市美術館アートスタジオ

創ってみよう！鴻臚館の香り

広島大学学術・社会連携室学術・社会連携部企画推進部門研究員

田中　圭子

◇　ワークショップの概要

さまざまな種類の香料を用いて作られた芳香剤「薫物（たきもの）」の文化は、奈良時代には中国大陸から日本に将来されて、平安時代の上層社会において流行したと考えられています。鴻臚館が外交の拠点として栄えた平安時代の前期から中期にかけての時代には、天皇を頂点とする皇族をはじめとして、貴族や地下の官人、僧侶、医師などの人々が考案ないし所持したと伝わる薫物の処方（しょほう。以下、レシピと称します。）が書き残されました。こうしたレシピの記述からは、この時代の薫物は、身分や階級、職掌、国籍から性別までにかかわらず、様々な人々により行われたことが伺えます。

薫物は、平安時代を中心とする人々にだけ行われた文化ではありません。伽羅などの高価な名香を賞玩する「香道」が流行した室町時代以降の時代にも、皇族や貴族、武家の家々で調合、使用されていました。こうした時代の人々は、平安時代以来の薫物に学びながら、平安時代には用いられない材料を交えて、新たな配合、名称による薫物のレシピを次々と考案したようです。こうした新たな薫物は、和歌や俳句、謡曲の〈ことば〉と〈情景・心情〉に取材して、名称や芳香を工夫されたと考えられます。

本日は、こうしたいわば鴻臚館時代の人物ゆかりの薫物のレシピの内、嵯峨天皇寵臣で藤原氏長者の閑院大臣藤原冬嗣が考案ないし所持して後裔に伝わったとされるものを、皆さんと一緒に調合します。また、参考として、平安時代以降の時代に新たに考案されたと見られる薫物の材料と香りもご紹介します。その後、皆さんそれぞれのオリジナルの香りを、本日ご用意しました材料を用いて調合し、命名いただきましてから、完成品の香りを聞きくらべてる〈創作薫物コンペ〉も開催いたします。どうぞ張り切ってご参加いただきますよう、お願いいたします。

◇　鴻臚館時代の薫物「侍従」

本日は、次の薫物の材料、及び完成品のサンプルを、レシピの記述に従ってご用意しました。

なお、諸般の事情により、材料の内、「麝香」については「麝金」を、「薫陸（くんろく）」については「安息香」を代用しています（注①）。また、「麝金」には古来「熟麝金」や「黄麝金」、「青麝金」など複数種類が存在しますが、今回はいわゆるターメリックに統一して準備いたしました。あらかじめご了承ください。

「侍従」（ジジュウ。平安時代の薫物）

・出典：『薫集類抄』（参考文献①）

・レシピの考案／所持者：閑院大臣藤原冬嗣（宝亀六(775)―天長三(826)）

・レシピの内容・目方の大小（使用した香具の一般名称・グラム換算量）

沈四兩・大　　（沈香・150.0 グラム）

丁子二兩・大　（丁子・75.0 グラム）

甲香一兩・大　（貝香・37.5 グラム）

甘松一兩・小　（甘松香・12.5 グラム）

熟麝金一兩・小（麝金香・12.5 グラム）

計　287.5 グラム

◇ 参考：室町、江戸時代の薫物

「千種」（チグサ。室町時代の新作薫物）

・出典：「薫物黒方秘方」（参考文献③）

・レシピの考案／所持者：龍翔院三条公敦（永享十一(1439)－永正四(1507)）

・レシピの内容・目方の大小（使用した香具の一般名称・グラム換算量）

沈香五兩・小　（沈香・62.5 グラム）
丁子二兩・小　（丁子・25.0 グラム）
貝香一兩・小　（貝香・12.5 グラム）
白檀一兩・小　（白檀・12.5 グラム）
薫陸一兩・小　（安息香(代用)・12.5 グラム）
麝金一分・小　（麝金香・3.1 グラム）
甘松二分・小　（甘松香・6.2 グラム）
麝香二分・小　（麝金(代用)・6.2 グラム）

計　140.5 グラム

「山枕」（ヤママクラ？江戸時代の新作薫物）

・出典：「薫衣香方」（参考文献④）

・レシピの考案／所持者：近衛殿（個人名なし、家名のみ）

・レシピの内容・目方の大小（使用した香具の一般名称・グラム換算量）

麝香二分半　（麝金(代用)・7.8 グラム）
龍脳二分半　（龍脳香・7.8 グラム）
藿香二分　（藿香・6.2 グラム）
丁子二分　（丁子・6.2 グラム）
白檀二分　（白檀・6.2 グラム）
薫陸二分　（安息香(代用)・6.2 グラム）
生脳二朱　（樟脳(代用（注②）)・1.0 グラム）
変脳一分二朱　（片脳油(代用（注③）)・3.6 グラム）

計　45.0 グラム

◆ 参考文献

① 拙著『薫集類抄の研究：附・薫物資料集成』（三弥井書店、2012 年）に校本テキストを掲載しており参照されたい。

② 拙稿「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『万方』及び『香具撰様調様』影印と翻刻：附・『万方』及び『香具撰様調様』人名家名等解説及び索引」（『薫物書の研究』、第 4 号、薫物書研究会、2018 年 3 月）に全文を影印、翻刻しており参照されたい。

③ 拙稿「宮内庁書陵部所蔵「薫物黒方秘方」翻刻」（『広島女学院大学日本文学』、第 19 号、広島女学院大学文学部日本語日本文学科、2009 年 7 月）に全文を翻刻しており参照されたい。

④ 薫衣香方、一冊、陽明文庫所蔵、貞享五年、基熙公御寫、請求記号：94954

◆ 注

① 「麝香」はジャコウジカから採取されるが、ワシントン条約により新規の大量生産と取引が禁じられており、市場での取引価格が高騰している。この為、化学合成された麝香エッセンスが代替品として使用される場合もあるが、一部の麝香エッセンスについては、人体への影響が懸念されている。

「麝香」の入手が困難であることは、平安時代から既に生じていたらしく、当時の類纂と伝わる薫物指南書には、「麝香」の代用品として「麝金」を使用せよと説かれる（参考文献①）。江戸時代の類纂と伝わる指南書には、香具屋の商う「麝香」には偽物がまま含まれること、代用品として「麝金」の他に「甘松」を使用するのも良いこと等が記載される（参考文献②）。

「薫陸」もまた、入手しにくい香具の一つである。香料専門企業などでは類似の効果が得られる「安息香」を代わりに使用する場合がある。

以上のことから、今回の展示では、「麝香」の代わりに「麝金」を、「薫陸」の代わりに「安息香」を処方することとした。

② 「生脳」は、樟脳に近い芳香を持つ樹脂で、水分を多く含んだ状態の香薬であったと考えられる（拙稿「新作薫物「冨士」の香具「生脳」について―東山御文庫伝来の薫物書の記述を中心に―」、『香料』、276号、日本香料協会編・発行、2017年12月）。今回は、水分を蒸発させて結晶化した状態で市販される天然樟脳を代用した。

③ 「変脳」は、樟脳に同じく樹木の樹脂を香薬としたものと考えられるが、原材料等の詳細は管見に不明である。

江戸時代の薫物指南書には、「返脳」、「片脳」として「変脳」と同じ字音の香具が記載される。「返脳」は前注「生脳」を焼き返して水分を蒸発させた状態を云う（前注所掲載の拙稿「新作薫物「冨士」の香具「生脳」について―東山御文庫伝来の薫物書の記述を中心に―」）。この為、現在市販される樟脳の状態に近い可能性がある。

今回は、「変脳」が「返脳」の異表記による同義語であると推定した上で、「生脳」の代用品として水分の乏しい市販の樟脳を使用したことへの配慮として、同じく樟脳を原料とし、樟脳から抽出された油脂である市販の「片脳油」を、処方に記載の分量だけ配合した。

本紙及び本展示は、JSPS 科研費 JP18K00340 の助成を受けたものです。